号外 続 継体天皇

ようやく大和入りした継体天皇。倭国の大王として混乱する国の立て直しを行うことになりました。しかし、その前には大きな問題が立ちはだかっていたのでした。

舞台は九州。一体何が起こっていたのでしょうか。

その謎を解くのが、福岡県八女市にある岩戸山古墳です。墳丘の長さは138㍍高さ20㍍の古墳。6世紀後半の古墳としては全国有数の規模を誇る古墳です。この古墳の主は筑紫君磐井(ちくしのきみいわい)。継体天皇と同じ時代に北九州一帯を治めた豪族です。

豪族の力を示すものとして、古墳の周りには埴輪が置かれているが、この岩戸山古墳には石で作られた石人石馬が置かれていました。その中には兜をかぶった人の顔の巨大な石人があります。よく見ると日本にはない丸い兜が多く、これは当時の渡来人がかぶっていたもので、筑紫君磐井が外人部隊を従えていたものと推察できます。

このような大きな石像を加工するのに、九州各地から職人が集められたと思われます。

職人達は筑紫君磐井のために石像を作り、これを配置することで、他の豪族への見せつけ・実力を示す狙いがあったと学者は考えています。

また、筑紫君磐井の力は九州だけに留まらず、朝鮮半島にも影響を及ぼしていました。

衰えた大和政権の立て直しを図る継体天皇。九州で自立の筑紫君磐井とどう向き合うべきか。

朝鮮半島ともパイプを作り上げていく筑紫君磐井。このまま勢力を伸ばすと大和から独立しかねず、大和に攻め込んでくるやも知れない・・・。

この際、九州と大和が手を組んで新しい政権を作ることもありかも・・・。しかし、各地の豪族の勝手な振る舞いを放って置くと、いつまで経っても国がまとまらない・・・大和の我々が中心となって国造りをせねばならぬ・・・

ということを考えていたのでしょうか。

答えは今城塚古墳で沢山出土した円筒埴輪にありました。意識的にその上部に描かれているのが三日月型の船体に2本のマストが立っている図。これは大型輸送船をモチーフに描かれているものと考古学者は言います。

日本書紀によれば、継体天皇は6万人もの兵を動員して筑紫君磐井との戦いに臨んだとあります。結果は、大和軍の圧勝に終わりました。天皇の命令にも従わない筑紫君磐井を殺した。と記されています。

この戦いの後、継体天皇の力が全国に及んでいたことを示すものが今城塚古墳から沢山と出土しています。

極めて異色な継体天皇ですが、継体天皇が越の国に住んでいた当時、現在の福井平野は大きな湖沼であって、そこに九頭竜川など3つの大河が注ぎ込んでいました。人々は大雨のたびに水害に見舞われ苦しんだといいます。

そこで、継体天皇は、河口に水門を開き、湖沼の水を日本海へ流出させ、その跡を一大田園地帯として開拓するとともに、水運、灌漑のための水路をつくったといわれています。

なぜ継体天皇がこのような治水事業を行えたかと言えば、日本海側を治めることによって朝鮮半島との交流も生まれ、継体天皇と百済の武寧王の繋がりも強く、武寧王から人物画像鏡などが送られており、外交の広さが読み取れます。若いときから朝鮮半島との交流の中で培ってきた人脈がものを言い、多くの渡来人の技術を投入できたのです。

当時、堰を造るために働いていた人たちが飲み水が無くて困っていたところに継体天皇が出向き、自分の弓で岩を叩いて水を湧き出させたという伝承があり、これを元に明治16年に足羽山の石工たちの奉仕によって弓を持つ継体天皇の石像が創られたと言われており、さらに足羽山にある「足羽神社」の宮司は継体天皇の皇女「馬来田皇女」を祖先とするとも言われています。

また、越前市の東部にある味真野地域にも継体天皇に関する伝承が数多く残っています。

伝承由来に諸説あります。「粟田部」という地名は、これは継体天皇の名前「おおど」を表し、「おおど部」が変化した地名だとか、「日野神社」には継体天皇とその子の安閑・宣化天皇が祀られているなど、この地域にはゆかりの地と伝承されている所や神社が多く存在します。

現在、福井には、伝統産業から先端産業にいたるまで、ナンバーワン、オンリーワンの技術が多く存在している一方で、漆器や和紙などの伝統産業の起源には継体天皇が関わっているとする伝説が多く残されています。

おそらく朝鮮半島から伝来した文化と当地の職人の技術とが結びつき、新しい産業として花開いたものだと考えられます。

そうした、その時代において常に先進的なものを求めていくものづくりの精神が、現代に受け継がれ、福井の産業を支える大きな原動力となっており、まさに継体天王の偉大な遺産であるとも言えます。

時間軸と空間軸の交わる六条公民館で、平家物語に軸足を置ながら、毎月第3木曜日に過去へのタイムスリップを実施しますが、時折違う時代の福井ゆかりの偉人の時代に訪問する場合があります。

ちなみに初回は継体天皇が活躍した時代へ時間旅行することとなりました。ごゆっくりご堪能下さい。なお、歴史講座1時間内では語り尽くせないため、不定期に適時無料配付される瓦版なども参考にしていただければ幸いです。